全国病弱虚弱教育研究連盟研究協議会（京都大会）
ホームページ用　抄録原稿

1	発表者氏名	浅田　博美
2	学校名	大阪府立羽曳野支援学校
3	発表テーマ	自立活動における ICF を反映させた取り組み（仮） ～自分の病気の理解と自分の生活を考える～
4	学校概要	府立呼吸器アレルギー医療センターに隣接する本校は、府内の 6 病院（大阪労災病院、府立急性期・総合医療センター、府立母子総合医療センター、近畿大学医学部堺病院、近畿大学医学部附属病院、阪南病院）に設置した分教室を含む 7 部署において病弱教育を担うとともに、府内南部の分教室・院内学級の設置されていない病院や児童生徒の自宅における訪問教育を担っている。 本校の教育目標の 「楽しく学び、ともに育ち、豊かに生きる」にもあるように、 ○　よりよく生きるための知識と理解を培う ○　学ぶ楽しみと学ぶ意欲を高める ○　社会に積極的に参加し自己実現をすすめる という教育目標の実現に向けて、学習指導を実践している。
5	発表概要	この取り組みは、羽曳野支援学校本校の児童（ぜん息・アトピー性皮膚炎・食物アレルギーの病気のある児童）対象に“総合的な学習の時間”を中心に実施しています。本校には自分の病気を理解しながらも、自己管理が不十分で入退院を繰り返す児童生徒が少なくありません。本校では以前からこのような病気の理解とアドヒアランスに課題のある児童生徒自身が ICF（国際生活機能分類）の考え方を理解することで、退院後も病気と向き合って生活していくのに有意であるのではと考え実践しています。 この発表では、視覚障がいや肢体不自由等の生活を疑似体験し、心理的、物理的にどのような工夫があると、今まで諦めていた活動が可能になるのか、ICF の関連図に繋げていく作業を繰り返し、図で視覚的に示しながら考え方を積んでいきました。そして取り組みの完結編として、自分の生活において、“自分のやりたい活動の促進因子や阻害因子は何か（用語は用いない）”を考えたり気付いたりすることで、退院後よりよく生活することに繋げていきたいと設定している取り組みです。
6	成果と課題	【成果】子どもたちが持っていた病気の知識や、病気のために諦めていたこと、実現できたことなどを全員で関連図を作成する作業を通じて、退院後にどう行動していけばよいのか自分の生活を見なおすことができました。 【課題】この学習は 6 月～7 月に実施しているため、この時期以外に在籍している児童については、実施されていないことです。どの時期であっても実施することについては課題があります。また、子どものアドヒアランスの向上や自己管理にアプローチできたかが追跡調査できていないことです。